第1回 国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会 主なご意見

資料1

■複合施設としてのあり方・目指す方向性に関すること

・敷居が高いものではなく、0歳から高齢者、障害の有無に関わらず市民誰もが気軽に訪れ、活用できるものになるような工夫やそのための土壌づくりが重要。

・過去の災害も含めた今までの仙台を「知る」ことに向き合うという、未来志向の手前にある土台を確認するような視点があってもよいのではないか。

・文化芸術の持つ三つの力（①自分が楽しむだけではなく他の人に喜んでもらえる力②人々の交流を促し、つなげていく力③人々が力を合わせ、継続的なプロセスを創造に結びつける力）は社会をつくっていくうえでかけがえのない力である。これらをふまえて二つの施設が協力し合い、一つの方向性を持てるとよい。

・東北の他都市では既に2,000席規模のホールがあるため、施設の計画にあたっては、東北の中の拠点性、仙台の位置づけを明確にする必要がある。また、この複合施設が青葉山エリアの中でどのような位置づけで機能を発揮すべきか、他の施設とどのように連携するかという視点も必要である。

・青葉山エリア文化観光交流ビジョン策定に係る懇話会での意見を心強く感じた。「都心近くにありながら自然や文化資源もある」「特別な場所、上質な時間」「多様なストーリーが持てる場所」、これらのキーワードはこのエリアで施設を計画するに当たって重要な視点だと思う。

・今回の複合施設の構想はキャッチーなテーマ設定であるため、国際的な建築のコンペを行ってはどうか。それをきっかけに災害の文化ということをどう考えるか、世界的な議論を起こす。その資格が仙台にはあると思う。

・今年度からでも双方の連携事業に取り組むのがよいのではないか。今から様々なアクションを起こすことで、市民等がそれを体感しながら施設の完成を待つことができる。

・施設のネーミングを考えることも、複合ないし融合へのアプローチの一つではないか。また、それぞれに必要な機能はあるが、両者を一体融合のものとして検討することもできるのではないか。

・仙台は「エル・パーク」「エル・ソーラ」や「せんだいメディアテーク」など、新たなテーマについて、他の施設とカップリングさせて場を作ってきた実績がある。新しい文化を創るこの「仙台方式」の今回のテーマが「災害文化」だという捉え方もできる。仙台市民には仙台は市民協働のまちだというプライドがあり、その自負にふさわしいカップリングをして場をつくるということはポジティブなあり方だと思う。

・施設整備の実現に向けて、「共通で使える部分は共通で使い、規模を大きくしない」「この施設に全てを求めず、ここでしかできないことを中心的にやっていく」ことを意識する必要がある。また、各施設の使い方の違いやホールに求められる雰囲気と震災メモリアルに求められる雰囲気の違いをどう調整していくかが課題。

■人材配置・人材育成に関すること

・文化と災害をつなげるキュレーション人材、多様な主体・活動を本施設につなげる協働コーディネーターが必要。

・人材育成の拠点としての機能はとても重要。双方の施設で専門的な人材を育成、配置し、お互いに意識を高めながら協働ができる関係を作ることが望ましい。

・市が有する専門的なスタッフ（博物館の学芸員など）と連携するなど、多様な人材が関わることが必要ではないか。

・この施設はオーソドックスな施設とは違う、探索タイプのチーム編成があってしかるべき。

・双方の施設でハードのみならず活動そのものがシンボルとなることが大切。そのための人材確保は簡単ではないため、早期にコンタクトを取ることが重要。

■音楽ホールに関すること

・劇場法が施行されてかなりの年月が経つが、自分たちで創り上げることができないホールが多い。音楽をはじめとする文化芸術の土壌がしっかりしている仙台だからこそできることがたくさんあるのではないか。

・2,000席規模のホールがないことで、全国大会規模の合唱や吹奏楽、外国からの演奏家などが仙台を通り越して東北の他都市へ行ってしまうことに忸怩たる思いがあった。次世代を担う子どもたちに、必ず残すべき施設だと思う。

・ホール自体も楽器の一部であるので、ハイグレードな音響を備えた施設であるべき。また、ホールの大きさと同じ空間をとれるリハーサル室は舞台芸術の練習等に不可欠であり整備が必要。

・「音楽の力による復興センター」は、音楽と復興と橋渡しをして様々な活動を続けている。コーディネーターの役割で生かすことができるのではないか。

■中心部震災メモリアル拠点に関すること

・青葉山に「災害文化の創造拠点」をつくり、「災害文化」を市民のなかに溶け込ませていくことは、「災害文化」や「市民と災害との関係」を、仙台市民のアイデンティティにまで高めていくということであり、本施設がその象徴的なものになる。

・本施設で何をするかは時代と状況によっても変わっていく。「災害文化の創造拠点」としての安定的なタスクリストがなく、「災害とともにあるために我々はいかにあるべきか」「今、何をしたらいいのか、何をしなければならないのか」を常に考え、問い続ける施設。

・「憂鬱なものを突き付ける」施設ではなく、「災害文化」のための前向きな施設。

・各地の伝承施設とも連携・協調をする施設になるべき。これまでの伝承施設とは違うトーンで震災のことを伝え働きかける新しいタイプのユニークな伝承施設にする必要がある。複合整備は、それを具体化する可能性につながる。

・「時間をつなぐ人」も重要。震災の経験を持つ方々が、震災のことについて考え、伝えられる展示や機能が必要。記憶の継承の仕方は時間の経過により変わるため、タイムスパンを捉えて震災を伝え、それを災害文化まで高めていける人材が必要。